

平成25年度第1回遺跡見学会資料

平成25年5月11日(土)開催

かぞし おおごえ
加須市大越

なが たけ い せき
長竹遺跡(第4次)

かんじょうもりど
環状盛土から

床の赤い住居跡発見



長竹遺跡では、利根川の堤防強化工事に先立ち平成22年5月から発掘調査を行っています。

平成24年度からは縄文時代後期(約3,500年前)~晩期(約3,000年前)の環状盛土の調査を進め、膨大な縄文土器・石器とともに耳飾りなどのアクセサリーも豊富に出土しています。

今回、環状盛土の中から真っ赤な焼土を床全面に敷き詰めた大型の住居跡が見つかりました。ふつうの住まいとは思えないもので、原始の建築史をひもとくうえでも貴重な発見です。

主催：公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

共催：埼玉県教育委員会 加須市教育委員会

国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所



床全面に焼土を敷き詰めた住居跡の発見！

環状盛土の中層から、赤く焼けた土（焼土）が発見されました。この焼土面をていねいに広げていくと、一辺が10m以上の大きな四角形に広がることがわかりました。中央には、大きな炉（いろり 囲炉裏）が設けられていることから、床全面に焼土が敷き詰められた建物の跡とわかりました。壁際に沿って等間隔に並んだ杭と、出入り口と思われる場所に補強のため渡された横木が、炭となって当時のままに残されていました。通常の住まいとは異なる目的で使われていた構造の建物のようなのです。



焼土を貼った住居跡から、せきぼう 石棒・せっけん 石剣・どっこいし 独鈷石などの石製品、どぐう 土偶、せいまがたま ヒスイ製勾玉・どせい みみかざ 土製耳飾りなどの装身具が多く出土しています。これらはムラのお祭りなどで使われた道具と考えられます。



床に焼土を敷き詰めた住居が使われなくなると、上に土が盛られて再び赤い床の住居が造られています。同じ場所に何度も住居が建て続けられているので、この場は特別な空間だったと考えられます。環状盛土は、このような小さな盛土が次々に築かれて形成されたようです。

囲炉裏の起源？

四角く焼けた床には、囲炉裏のような丸い炉が造られています。まだあまり焼けていない粘土が、白く残っています。

